

〔研究論文〕

## 「公益」概念をめぐる渋沢栄一と原丈人

小坂 勝昭

〔Article〕

**Researching the Contributions to Japanese Capitalism of  
E. Shibusawa and G. Hara  
— Understanding the New Concept of “Public Interest Capitalism”**

**Katsuaki KOSAKA**

Since the Lehmann shock, American capitalism has collapsed because of failures of financial management. George Hara insisted that the causes of the breakdown of American capitalism were financial engineering, and ROE management seeking short term profits. For 10 years, Hara has been proposing a new paradigm and new ideas about the capitalistic system.

For maintaining modern capitalism, we must have the belief that Public Interests Capitalism will be the most important human economic system, not egoistic Private Interests Capitalism. This paper has 4 parts.

- (1) The meaning of Public Interest Capitalism presented by George Hara.
- (2) An evaluation of the contributions of Eiichi Shibusawa to the development of Modern Japanese Capitalism (Shibusawa established 500 companies in Japan.)
- (3) Shibusawa's stay in Paris for about 1 year and 7 months for learning European culture and political, and economic systems. He studied the European Banking system and Stock Market of that time in France. After coming back to Japan, he established the First (Daiichi) National Bank in Tokyo, among other contributions to the early capitalistic development of Modern Japan. Because he had studied the systems and the spirit of capitalism, it was possible for him to practice economic activities for attaining profits for the State of Japan. Modern capitalism in the Meiji era of Japan was accomplished by Shibusawa's single-minded practical activities. For him, the most important matters were national, and not private interests.
- (4) The characteristic common to both Shibusawa and Hara was their concern for the public and not private interest.

## はじめに

2008年の金融大不況の原因をめぐる議論の中で注目を浴び始めた一つの理論がある。原丈人が彼の『21世紀の国富論』（2007、平凡社）、及び『新しい資本主義—希望の大国・日本の可能性』（2009、PHP選書）で提案してきた「公益資本主義」（Public Interest Capitalism）という考え方である。日本経営倫理実践センター主催の国際シンポジウム『新しい時代の経営倫理を考える』（2009.11.18、国

際文化会館)においても基調講演『社会的企業の在り方と新しい資本主義』と題する斬新な内容の提案をされ、今日の資本主義が抱える「問題点」を明らかにすると同時に「公益資本主義」という新しいアイデアを提示された。「公益資本主義」という概念は今や真剣に検討せざるを得ない大きな課題となりつつあると言ってよからう。

この論文では、原丈人の「公益資本主義」というアイデアに込められた新たな資本主義像について考察すると同時に、今から100年前に渋沢栄一によって実践された偉大な業績がやはり「公益資本主義」につながるアイデアを体現したものであったという観点から彼のはたした偉大な貢献に光を当ててみたい。渋沢は、「公益資本主義の精神」を自ら実践し日本資本主義の形成に貢献した人であった。

「公益資本主義」という考え方が何を意味し、その意義がどこにあるのか、を明らかにするためにはいくつかの「予備的作業」を試みる必要がある。まず、「公益」(Public Interest)という概念を明らかにすること、と同時に「公共」(Public)概念を明確にすることが大きな課題であることに気付かざるを得なかった。公益を「公共の利益」、「公に貢献しうる」、などと解釈しうるからであり、従って、それでは「公共とは何か」に答えなければならないだろう。

しかし、この作業は想像以上に困難を伴う仕事であり、超え難い壁が幾重にも覆いかぶさっていることに気付かざるを得なかった。単に英語のPublic Interestの邦訳が「公益」であるとする常識に従えば理解が深まるのか、という疑問であった。また、Publicという概念の真の意味についても考察が必要である。これまでに「公」、「公共」という概念の検討はたびたびなされてきた。

例えば、2000年度の日本法哲学会では、「統一テーマ」として『「公私」の再構成』を取り上げている。ここでは、その時に展開された論議や、ほかの文献に依拠して考察を進めたい。

## I. 「公共性」とはなにか

今、『『公的なるもの』についての明確な自覚が要求される』という森際康友の指摘<sup>(1)</sup>は10年間という時を経ても今日でも妥当する指摘であるということは何を意味するのだろうか。この数年間を見ても「市民社会論」の台頭および関心が何を物語っているのかを深く考える必要がある。私の所属する「日本経営倫理学会」の構成員は、企業が置かれた社会を何らかの「公共性を備えた社会」と受け止め、それを「市民社会」と読み込み、また最近では「消費社会」と読み込むことも期待されている。

そして、この現実社会で連続して発生する「企業不祥事」に歯止めがかからない状況を苦々しく思いながら、企業の側に原因があるのではないか、いや企業を野放しにしているからだ、とそれぞれに批判的な思いがあるだろう。SOX法がだめなら、何か他の手段が必要だと具体的な制度的措置に期待するのも当然かもしれない。非常にタイミングよく、2月28日付の朝日新聞の「私の視点」に「企業行動研究部会」部会長の上原利夫の一文が掲載された。その内容は、これまでの監査役制度の弱点を補うための提案であり、従業員(労働者)代表を監査役に加えるだけでなく、「消費者代表」からも適任者を選んではどうか、という提案である。一部を引用する。

「従業員(労働者)と消費者代表の監査役は、いずれも公益性を担い、独立性が求められる。それを担保するために「公益・独立監査役協会」とでも呼ぶべき公益法人を創設してはどうか」(同記事から)と述べられた。<sup>(2)</sup>

この上原の指摘から伺えるのは、企業の監査役制度を従来の「なれ合い型」から「公益性」を備えた公平な制度に置き換えてはどうか、という提案である。外部監査役を誰が引き受けるのか、という問題は日米企業に共通する課題であることは十分に認識されてきた。ゴルフ仲間や、親友に引き受けさせる、という次元の方法を維持してきたつげは至る所でボロが出ている。

また、企業行動部会員の西藤輝中央大学特任教授からは、Harvard Business Reviewの2010年Jan - Feb版に掲載された最新の論文”The Age of Customer Capitalism”の存在をご指摘いただいた。

著者のロジャー・マーチンは、論文「顧客資本主義の時代」のなかで「株主価値をうみ出そうと欲するなら、消費者（顧客）の満足を極大化することをめざすべきである。これを聞いて驚く人はいないだろう。P.ドラッカーはビジネスの第一の目標が顧客を獲得し、顧客を離さないことだと言っていたのではないか」と書いている。<sup>3)</sup>

このマーチン論文の示唆する内容から推測できるのは資本主義のこれまでの歴史を通観して出てきた結論があまりに単純、あまりに明快な提案であったことと、さらに数十年前に既にあのP.ドラッカーによって彼の古典的業績の中で示唆されていたことである。

上述の上原、マーチン論文はいずれも公共性、公益に比重を置いた「公益資本主義」の主張であると言えるだろう。「公共」とは「社会全体」を指し、社会全体の利益が「公益」であるとすれば、「社会全体」という概念は何かを明確にすることが必要である。個人を超えた、個人を制御できる全体を「公共社会」と呼ぶ。公共社会を構成するすべての成員にとっての利益を公益と定義することができるだろうか。

この論文では、「公益」という概念に焦点をおき、次に「公益資本主義」という概念の妥当性を検討することを目標としている。水道や電気などの公共性を最も必要とする事業を公益事業と規定してきた。また、「公益法人」とは、①公益に関する事業を行うこと、②営利を目的としないこと、③主務官庁の許可を得ること、と規定されている。1896年（明治29年）から2008年までの従来の公益法人は、学術、芸能、祭祀、宗教その他の公益に関する社団、または財団であり、営利を目的としないもの、と定められている。

それに対して、営利法人である株式会社は、①法人格、②株主の有限責任、③持ち分の自由な譲渡性、④取締役会への経営権の委任（所有と経営の分離）、⑤出資者（株主）による所有、を特徴とする。

筆者は、この株式会社制度に大きな抜け穴が生じてしまったと考えている。例えば、「有限責任制度」、そして「所有と経営の分離」が、今日の企業不祥事の元凶となっていないだろうか。この問題の考察は次の論文に委ねたいと思う。

## I - 1. 原丈人の公益資本主義

「公益資本主義」の台頭は、執行役員の高額報酬だけでなく、それを支える「利益を生み出す方法」を「金融工学」という手法を駆使したことにある。原丈人は、『新しい資本主義』の中で現在のアメリカ資本主義の方法に懐疑的である。株主利益を短期的に増やすためには経営者はROE（株主資本利益率）を重視する。要するに、「株主の投資に対して、どれだけのリターンを上げたか」を指標とする考え方が蔓延したのである。こうして「モノづくり」軽視の資本主義がアメリカを崩壊へ追い込んでいく。

原は、「企業経営者も労働者も土日は稼げないけれど、金利は土日も稼いでくれる。製品を生み出して価値をつくり出そうとすれば、汗水を流さなければいけないが、ファンは監督するだけだ。

自分たちはきれいで静かな場所において、労働は現場にやらせておけばいい。」と述べている。<sup>(4)</sup>

これが、今のアメリカ資本主義なのである。原は、「金融は産業の主役ではなく、産業に力を与える脇役であり、縁の下の力持ちなのだ」<sup>(5)</sup>という。原が恐れるのは、「金融工学という道具でみずからをつぶすという歴史はくりかえされる」と危機感を抱いている。現にいま、「サブプライムのあとは、排出権取引だ」と警告を発している。<sup>(6)</sup>

筆者は、現在「環境社会学」という講義を担当しているが、「この原の一言を環境庁の役人たちはわかっているのか、」と講義で叫んでしまった。ウクライナに対して排出権取引で何千億のカネが失われている。日本のカネは排出権取引という美名のもとに、完全にねらわれている。最近入ってきた情報だが、ウクライナの新政権が旧政権を告発したというニュースである。旧政権が排出権取引で得た金を不正に使用していたというもので、その金額は260億円であるとのニュースであった。

筆者は原の公益資本主義の構想に賛成してきた。もし、「公益資本主義」というタームが解り難いというのならば、それを、私は「公共資本主義」(Public Capitalism)と呼びたいと思う。しかし、いずれにしてもROEがのさばる資本主義が限界にあることは明明白白の事実である。

## I - 2. 公共性の概念

中世時代から「お上」(天皇)が「おほやけ」と考えられてきた。徳川の藩政時代に「お上」とは、徳川家であり、地方の藩「加賀藩」では前田家が「お上」であった。そして、前田家は権力(徳川)には歯向かうな、という生きる知恵を学んだはずである。しかし、実際のところ要領よく生きる人は富と権力には抵抗しない。なぜなら、権力と富の持つ「存在拘束性」の力を知っているからである。

J. ハバーマスは現実社会を、こうした「富と権力からなるシステム」と「コミュニケーション行為からなる生活世界」という二つの概念からなるものと説明する。社会学者の今田高俊(東京工大教授)は、ハバーマスに準拠しながら「ハバーマスが最も憂えているのは、貨幣や権力というメディアを用いた制御が肥大化することで、人間がほんらい持っているコミュニケーション能力と対話的理性が奪われ(損なわれ)て、シンボルを用いた社会統合の産出力を喪失していることだ、そこが問題であると彼は言う。」<sup>(7)</sup>と述べられ、ハバーマスの主張を代弁している。

## I - 3. 私益と公益の断絶

Public Interest Capitalism という概念が今注目されている。この言葉の訳語「公益資本主義」が正しいのか否かもまだ不確かな状況であるが、「公共」という言葉とともに検討してみる必要があるだろう。

「公益」とは、「公共の利益を縮約した概念である」(政治学者・阿部斉)。とすれば、社会を構成する個人、集団には当然なことだが「私的な利益」があり、それを守ろうとすると考えられる。したがって、社会を構成する全構成員に共通する利益を「公共の利益」と呼ぶとすると「私的な利益」と「公共の利益」の関係性が問題となる。公共性についての研究は先駆的業績としてはJ. ハバーマスの『公共性の構造転換』(1963)がある。しかし、こうした業績は我が国の土壌の中には定着しがたい。

公共性という概念は、優れて政治的概念である。一票をもつ(投票権)者が投票行動によって全体の意思決定を行うことが民主主義的意思決定であるとされている。しかし、経済優先の資本主義は民主主義ではなく、企業利益優先主義、株主利益優先主義の世界を招いた。

また、社会学の世界では、「個人と社会」問題は、「ミクロマクロ問題」として一種のアポリアを形成する難問と考えられてきた。というのは、全体社会は部分の集合以上の性質をもつ。個人の行動の特徴から社会全体を説明することは難しい。それを「創発的特性」(Emergent Properties)と呼んできた。従って、「私益の集合が公益である」とは言えない、ということになる。私益と公益は性質が異なると考えなければならない。全体の論理は部分の論理とは異なり断絶があるからだ。「戦争」に臨んだ人間の残酷さは、個人の性格からは説明出来ない。

#### I - 4. 資本主義の陥穽

資本主義制度とは私企業の集合体である。スミスはそれぞれの企業経営者が利益を競っても結果として「(神の)見えざる手」によってうまくおさまる、と考えていた。しかし、現実の経済社会は企業間の格差を生みだした。資本主義先進国のアメリカの金融資本主義の行きついた先は金融工学という手法によるもので予想を超えた世界であった。ロジックを追求した結果として現出したのは予想外の世界の出現であった。健全な経済社会の中で生きることを望んでいる「普通の市民」のコントロールを超えた冷酷な社会の出現を意味する。急速な経済成長が続けばその恩恵が下層階級の生活水準を上昇させてきたことは事実である。しかし、所得格差の解消には繋がらなかった。アメリカ資本主義は、金融工学の手法によってむしろ所得格差を拡大させただけでなく、リーマンショックを招き、大手の銀行、証券会社の社会的責任が問われている。社会全体の人びとに平等に利益が配分される社会の実現は永久に困難な課題であろうが、「弱者切り捨て」の社会が人間社会を幸福にするはずがない。

アメリカ社会は「機会の平等」を重視した「実力主義社会」を標榜し、高学歴化と高度な専門技術に裏付けられた高度情報社会を形成した。しかし、個人の能力差、身分差は解消できず、生まれつき備わった才能、財産も決して平等に配分されていない。今日の「成果主義の失敗」は、機会主義に価値を置きすぎた結果でしかない。同じスタートラインに着くことさえ困難な格差社会を平等社会と呼べるはずがないのだ。近代資本主義を生成させた「禁欲的な労働倫理」(M. ウェーバー)はどこかへ吹っ飛んでしまった。

## II. 渋沢栄一の業績 — いま何故渋沢栄一なのか

原丈人の公益資本主義の概念に未来の資本主義の到達すべき理想像を描くことが可能か、という一点に私は関心を持ってきた。そうした期待をもって公益資本主義の考え方に熱い視線を抱いているのは多分筆者だけではあるまい。しかし、原とならんで次の考察の対象を渋沢栄一においたのは何ゆえか。渋沢栄一が登場したのは、100年以上前の江戸幕末から明治期にかけての日本資本主義の黎明期であった。日本資本主義の基礎を形成した人物と言ってよからう。100年以上の時間を超えて、現代の原丈人と渋沢栄一がつながるという予感であった。

渋沢栄一を研究すればするほど栄一という人間に関心をもつようになる。渋沢栄一の人生を追いかけて分ることは、人間社会を絶えず相対的に位置づけることが出来たことである。危機的な徳川幕府の末期に慶喜の弟である昭武の随員としての1年7カ月にわたる外国体験から、日本を相対的に位置づけることができたこと、明らかに日本を超える先進国の文化、経済、政治の在り方から非常に多くの事柄を学び、自分の人生の生き方に生かすことが出来たことであろう。昭武の随員6名は水戸藩から選ばれた侍であったが、昭武の身边警護にエネルギーの大半を奉げていた。彼らの忠

誠心は武士としては立派であったとしても、日本の武士社会を100%疑わずに隋員として勤めていた。渋沢栄一との決定的な差異は、日本の士農工商社会を既に日本にいたときから疑問視していた栄一のような洞察力を身につけることが出来なかつただけでなく、武士社会の終焉を予想すらできなかったことであろう。安田善次郎、福沢諭吉も栄一と同様に末期的状況の江戸時代の断末魔から、武士社会の限界を察知したことである。武士身分の安田は武士にあいそを尽かして商人へ転身してしまった。栄一も故郷の代官から十代の頃に差別的扱いを受け、カネをむしり取られる幕藩体制に絶望していた。

## II - 1. 渋沢栄一の置かれた時代背景

渋沢栄一（天保11年2月13日〈1840.3.16〉 - 昭和6年〈1931〉11月11日）は、福沢諭吉、大久保利通などと同世代に生きた「日本資本主義の父」と呼ばれる偉大な存在である。明治は遠くなりにけり、ではなく、明治時代こそ日本の歴史を考える場合に最も重要な時代であった。明治は時代ではなく、「明治国家」ともいべき独立して考察すべき重要なエポックメイキングであるという主張があるほどである。鎖国期間中の江戸時代の最後に現れた偉大な先人たちの一人が渋沢栄一であった。彼が生まれた深谷市（血洗島は50戸の小村）の生家は、商才のあった父の市郎右衛門が始めた藍玉の製造販売が成功し、村内第二の資産家となった。栄一が7歳の時、10歳年上の母方の従兄弟の漢学者、陽明学の尾高惇忠（藍香〈らんこう〉）から『四書』、『五経』、『通俗三國志』、『里見八犬伝』、『漢楚軍談』、『呉越軍団』の手ほどきを受けた。惇忠の偉大な点は、『四書』、『五経』など幼い栄一には所詮は理解できないのだからと好きなものを自由に読ませたことで、寝転んで読んでも許していた。栄一は良い先生に恵まれたのだ。後年『論語談義』ほかの著書を出版しているが、人生の生き方指南のような書物である。『孔子一人間どこまで大きくなるか』（三笠書房）などがそれである。最近、中国では栄一の影響で孔子の教育を重視し始めている。共産主義の教育の欠陥は、マルクスや、毛沢東の弁証法から解き放たれず、中国の先人の孔子、孟子の教育の重要性に今頃気づき始めたことである。中国の悲劇であり、共産主義の悲劇である。北朝鮮の悲劇も同様である。栄一が通った約1キロの道は現在「論語の道」と呼ばれ、深谷市のHPや小学校で渋沢栄一と尾高惇忠は郷土の英雄として教えられている。

実は、尾高惇忠の孫に尾高三兄弟と言われる、社会学者の尾高邦雄元東大教授（1908 - 1993）、法哲学者の尾高朝雄（1899 - 1956）元東大教授、指揮者の尾高尚忠（1911 - 1951 早世）がおり、さらに東洋美術研究者の尾高鮮之助（1901 - 1933 早世）、刀江書店の創立者で、武州銀行副頭取であった尾高豊作（1894 - 1944）がいる。この5人は兄弟で、母は渋沢栄一の娘である。

筆者は、仙台を離れてから東大大学院の高橋ゼミに出席させていただいた。尾高邦雄門下の高橋徹（1927 - 2004）東大教授に師事して、ダニエル・ベル（1919 - ）、アーヴィング・クリストル、ハーバースなどの理論を学んだ。高橋教授は、よそ者の筆者を受け入れ、教育してくださった。尾高邦雄、福武直、高橋徹編集の『社会学講座』（東京大学出版会）は、日本社会学史の金字塔であろう。

雑誌 The Public Interest 所収の D. ベルの論文「未来のための議事日程」は後に『脱工業社会の到来』（The Coming of Post-Industrial Society, 1973.）の最終章として収録された論文である。高橋教授のご厚意で、この論文のコピーが仙台の研究室へ届いたときの喜びは筆舌に表わせない。

ベルとクリストルは『パブリック・インタレト』誌の編集にも従事していた。ベルは後にハーバード大学の社会学部の教授となり、世界に大きな影響を与えている。クリストルは当時のアメリカの文壇でネオコンサーティブ（neo-conservative）として位置づけられていた。ベルも立場は近いだろう。

筆者は、この雑誌に掲載されたベルの論文から倫理学者J. ロールズの正義論の時代背景と理論的位置づけを学んだ。さらに、ビジネス倫理の研究に進んだきっかけもロールズの正義論であった。The Public Interest 誌掲載のベルの論文、あるいはクリストル論文は当時の研究者に非常に大きな影響を与えた。

## II - 2. 渋沢の思想基盤 — 近代国家の条件 —

渋沢栄一は、24歳のころ師の尾高惇忠の影響で水戸学を学び、尊王攘夷派の影響を受け高崎城乗っ取り計画にも加わったが、尊王攘夷派の「師士」たちの挙兵の失敗から彼らの限界を知るに至る。そこで、伝手のあった一橋家に仕官し武士身分を獲得した。そして、一橋（徳川）慶喜に仕え、公武合体論、公議政体論へと傾斜していった。一橋家で御用人として働く中で、日本と諸外国の力の差を知ることとなり、攘夷派から開国派へと立場を転換していった。そして彼の力量、有能さが次第に周囲から認められることになる。

そして、徳川慶喜の弟、徳川昭武（1852 - 1910）は、パリ万国博覧会の視察をし、さらにその後ヨーロッパ各国を訪問した後、パリへの留学が計画されていた。昭武の隋員に推挙された栄一は、慶応3年正月11日、一行29人の一人としてフランス船アルヘー号で横浜を出発した。後に出版された渋沢の『航西日記』は、この一行の旅行中の事柄や、出来事がこと細かく記録された貴重な日記である。一行が、フランス、ロンドン、ベルギー、イタリアへ旅行した記録が詳細に書かれている。<sup>(8)</sup>津本陽の『小説渋沢栄一（上）[下]』は、この記録に基づいて書かれた小説であるが出色の出来である。<sup>(9)</sup>

幕末の外国への旅がどのように行われたかを知るために『航西日記』の記述から引用すると、以下のようなコースをたどっていることが分り興味深い。一行は正月15日に上海へ到着し、イギリス人経営のホテルへ宿泊。フランス公使の出迎えをうける。正月21日に香港でフランス郵船アンペラトリスに乗り換え、サイゴン、シンガポール、セイロンと寄港した。2月11日、一行はスエズに入港、スエズから夕方汽車で西へ向かい、深夜カイロを通過し、翌朝アレキサンドリア着、2月23日、フランス提督に迎えられ、汽車に乗り29日朝フランスのマルセイユ港着。砲台から祝砲、陸軍総督の迎えの小舟で上陸し、ホテル・マルセイユへ。3月2日には馬車でツーロン軍港に出向き、ドックの軍艦を見学。翌日はマルセイユに帰り、3月6日マルセイユ発、リヨン到着。翌3月7日、午後7時にパリ到着。一行は駅頭で大勢の役人や、先に留学していた武士たちの出迎えを受ける。日本の名誉総領事フロリ・ヘラルトの先導でグラント・ホテルに入った。<sup>(10)</sup>

2か月の長旅の後パリに到着し、水戸藩の隋員らとともにパリに滞在した渋沢栄一は、背広を注文し、パリの「上下水道」を視察した。いずれ江戸にもこうした施設が出来るだろうか、と記している。栄一は水戸藩の隋員たちと違って、洋食にも好き嫌いなく、好んで食し、むしろ楽しんでいた。彼は、銀行家のフロリ・ヘラルトから証券取引所、株式、公債、などについて懇切丁寧な教えを受けている。ヘラルトは実際に証券取引所へ栄一を案内し、実際の業務を見せて理解させた。津本陽は「栄一を導いたフロリ・ヘラルトは、日本に資本主義をうちたてるおおきな原動力となった恩人であった。」<sup>(11)</sup>と述べている。津本陽は日本企業の不祥事に対して大きな関心を持っている。従って、栄一の日記の読み方も栄一がフランスの銀行制度、証券市場、から多くを学んだことが強調されている。

渋沢栄一は、大政奉還に伴い、慶應4年（1868）が明治元年に改元した11月3日に横浜に帰着したのでヨーロッパに滞在したのは1年7カ月であった。昭武が水戸藩を突然に相続することになっ

たのは、先代の急死によるもので水戸藩から緊急の使者が事態を知らせるために急遽フランスまでやってきたからであった。しかし、栄一の内面はもう少し異なっていた。フランスで学ぶことがまだ多くあるから昭武とともに滞在するべく、さらに節約して、と考えていた矢先であった。栄一は一行の生活に必要な経費の計算（会計係）を任されていた。

また、言葉の面では、ヨーロッパ滞在中に渋沢栄一に英語を教えたのは同行したアレキサンダー・フォン・シーボルトであった。また、昭武に随行したことによって西欧事情を学び、西欧文明を積極的に吸収し近代国家とは何かを学んだ。また、滞在したフランスの「株式会社制度」、「銀行制度」を学んで帰国したことが栄一の晩年に多くの「株式会社設立」に携わることにつながった。

帰国後、静岡に謹慎していた慶喜と面会し静岡藩より出仕を命ぜられるが、慶喜から「これからはお前の道を行きなさい」と諭された。栄一は新政府からの借金返済のため明治2年（1869）1月、静岡に商法会所を設立したが、大隈重信に説得され10月に大蔵省に入省した。そして、大蔵官僚として改革案の企画立案や、度量衡の制定、国立銀行条例制定、などに携わった。<sup>12)</sup>

しかし、予算編成をめぐる大久保利通や、大隈重信と対立し、明治6年（1873）に井上馨とともに退官した。退官後まもなく官僚時代に指導した第一国立銀行（現、みずほ銀行）の頭首に就任することとなった。また、七十七国立銀行（仙台市）設立の指導のため第一国立銀行から人材を派遣している。そのほか、東京ガス、東京海上火災保険、王子製紙、秩父セメント、帝国ホテル、秩父鉄道、京阪電気鉄道、東京証券取引所、キリンビール、サッポロビール、など多種多様な企業の設立にかかわり、その数は500以上と言われている。また、専修大学や、東京女学館の設立にも関係した。

渋沢が三井高福、住友友純、大倉喜八郎、安田善次郎、岩崎弥太郎、などと決定的に異なる点は「渋沢財閥」を作らなかったことである。「私利を問わず公益を図る」という信念を生涯にわたって貫き、後継者の恵三にもこれを固く戒めた。他の財閥頭主が男爵止まりであったが、渋沢だけが子爵を授かったのはこうした「公共への奉仕」が高く評価されていたためと言われる。こうした彼の信念こそ現代の原丈人の主張する「公益資本主義」にほかならない。

### II - 3. 渋沢栄一の公益概念

最近、渋沢栄一の「公益」概念を見直す動きがでてきているが、金融大不況以降、企業の社会的責任が強く問われており、健全な資本主義の在り方が求められているためである。しかし、栄一の中に始めに芽生えたのは日本の「国益」をいかに守るかという課題であったことは間違いのないだろう。明治時代を迎える日本が近代国家フランスの国家運営や、経済の在り方を見てあまりの格差に驚くと同時に、士農工商の身分格差に縛られた日本社会を近代化することの必要性に目覚めたはずである。フランスの経済事情から彼が学んだ事柄が「第一国立銀行」の設立に結実し、その後約500に上る企業の設立に参加した。こうした彼の業績は彼が自分の「私益」にこだわらず、日本国家を西欧並みに発展させたい、という悲願ともいえるべきものが栄一をつき動かしたからであろう。栄一の公益とは、「国益」であったと言ってよい。栄一は、晩年、社会、教育、文化事業にも力を注いだ。その精神的基盤となったのは孔子の哲学であった。



### Ⅲ. 原丈人の公益資本主義

#### Ⅲ-1. 原丈人(1952-)のアメリカでの出発

原先生は自ら学者ではないので、と注釈されることがある。しかし、慶応大学法学部時代は学生運動華やかなところで、恐らく日本の大学に嫌気がさして渡米したのであろう。アメリカでは中南米のエルサルバドルで第二のシュリーマンをめざしたが、現場の発掘作業に非常にお金がかかることに気付き、先ず資金を稼ぐことから始めようとスタンフォードの経営学大学院に入学しMBAを取得した。その後、国連のフェローになるが、国連組織に限界を見出し、再度スタンフォードの工学研究科でエンジニアをめざして研究し、終了した。その後、光ファイバーの事業を起こされた。それが成功し、その企業を売却してその資金をもとにして「デフタパートナーズ」を立ち上げた。それ以降、ベンチャーキャピタリストとして世界的企業を育成してきた。前代未聞の日本人である。

報告者は原丈人の「公益資本主義」の構想に胸をときめかせた一人である。某企業の管理職養成機関の入学式に参列した後のパーティーで偶然にお会いしたことが彼の「公益資本主義」の構想に触れるきっかけとなった。

原丈人が渡米した70年代、まだ彼がビジネススクールの学生時代に、時間のある水曜日ごとに、著名なベンチャーキャピタリストに会うことを考えたがなかなか会ってもらえなかったという。しかし、彼は1981年、考古学で使っていた光ファイバーのディスプレイにヒントを得て工場「ジーキー・ファイバーオブティクス」を起こした。巨大なディスプレイがデイズニーに採用されたこともあって、従業員50名の成長企業になっていた。しかし、83年この会社を売却して資金をつくった。そして、当初の目標であったベンチャー企業デフタパートナーズを84年に設立した。そして、当初からインターネットを中心とするソフトウェアに関連した技術分野に投資の対象を絞り込んだ。彼の今後の活動には目を離せない。先月の26日から今月の4日まで原丈人を代表としたバングラディッシュ訪問ツアーが組まれていた。報告者は今日の報告準備のため断念せざるをえなかった。中国のアフリカ進出もにらみ、原丈人の次の仕事はアフリカ救済の仕事であろう。

### Ⅳ. 公益資本主義の重要性 — むすびにかえて

最後に、原丈人の公益資本主義も実は栄一と同様、「国益資本主義」の訴えであると思っている。国の行く末を真剣に案じている政治家が皆無に近い状態であり、原のようにバングラディッシュのダッカにインターネット網を引き、「ブラックネット」というNPOと組んで地元の利益誘導のために実践している姿は、それを金儲けのうまい人と片付ける会員がいることを報告者はさびしく思っている。グローバル化の進行が止まることなく進行しつつある今日、排出権取引の意味もろくに知らずに税金をプレゼントし続ける役人や代議士には売国奴か、国賊政治家と呼びたい。

企業の社会的責任が問われている今日、栄一が存在、原丈人の存在は日本の誇るべき人材にほかならず、彼らの生き方や、人生を学びたいものである。

### 脚注

- (1) 日本法哲学会編『公私の再構成』、1頁。
- (2) 上原利夫「私の視点」、『朝日新聞』2010年2月28日号。
- (3) Marchin, Rojer, “The Age of Customer Capitalism”, Harvard Business Review, 2010, Jan-Feb, p.60.

- (4)(5)(6) 原丈人『新しい資本主義』PHP 選書、16 - 17 頁。
- (7) 今田高俊「社会学の視点から見た公私問題」、『公と私の社会科学—公共哲学(2)』2002 年、東京大学出版会、47 頁。
- (8) 渋沢栄一・大江志乃夫訳『航西日記』『世界ノンフィクション全集(14)』筑摩書房、昭和 36 年、291 - 388 頁。
- (9) 津本陽『小説渋沢栄一 (上)』幻冬舎文庫、平成 19 年。この小説から、論文として引用することはためられるが、残された渋沢の『航西日記』ほかの文献にあたって書かれており、栄一のパリにおける驚きや、外国での生活の様子、また故郷の家族への想いなどが非常によく描かれている。
- (10) 渋沢、『航西日記』参照。
- (11) 津本陽、『小説渋沢栄一 (上)』208 頁。
- (12) 渋沢栄一『徳川慶喜公伝 (上)』東洋文庫、平凡社、昭和 42 年。

## 参考文献

- (1) Harvard Business Review on Corporate Ethics, Harvard Business School Press, 2003.
- (2) 自由企業研究会『新しい資本主義』PHP 選書、1993.
- (3) P. Krugman, Phantasm in Capitalism, 《邦訳》北村行伸編訳『資本主義経済の幻想』ダイヤモンド社、1998.
- (4) P. Krugman. The Conscience of Liberal, W.W.Norton & Comp. 2008. 《邦訳》三上儀一訳『格差はつくられた』早川書房、2008.
- (5) 岩井克人『会社はだれのものか』平凡社、2008.
- (6) 中谷巖『資本主義はなぜ自壊したのか』集英社インターナショナル、2008.
- (7) L.C. Thurow, The Future of Capitalism, 1996 《邦訳》. 山岡洋一 / 仁平和夫訳『資本主義の未来』1996.
- (8) R.B.Reich, Supercapitalism, 2007. 《邦訳》ロバート・ライシュ『暴走する資本主義』、東洋経済社、2008.
- (9) 渋沢栄一『論語と算盤』角川ソフィア文庫、平成 20 年.
- (10) 渋沢健『巨人・渋沢栄一の富を築く 100 の教え』講談社、2007.
- (11) 渋沢雅英ほか『シヴィル・ソサエティ論』慶応大学出版会 2005.
- (12) 渋沢雅英ほか『日本の世界貢献とシヴィル・ソサエティ』慶応大学出版会、2008
- (13) 佐々木毅・金泰昌編『公と私の社会科学』東京大学出版会、2001.
- (14) 佐々木毅・金泰昌『欧米における公と私』東京大学出版会、2002.
- (15) 佐々木毅・金泰昌『日本における公と私』東京大学出版会、2002.
- (16) 横川信治・野口真ほか『進化する資本主義』日本評論社、1999.

本論文は、平成 21 年度の国際学部共同研究「善と悪をめぐる問題」（研究代表者：山崎裕子）の研究成果の一部である。また、「日本経営倫理学会」の第 2 回「研究交流例会」（2010.3.6 於：学会本部会議室）で報告する機会を与えていただいた。本稿は、その時の報告に加筆、訂正したものである。